

金沢市歴史的庭園振興プラン ー概要版ー

プラン作成の目的

近世城下町都市として成立して以降、一貫して戦災に遭うことのなかった本市には、主に藩政期から明治、大正、昭和の各時代につくられた歴史的庭園が今もなお多く残されています。武家社会の間で浸透した庭づくりの文化は、近代以降にも実業家や商人層などを中心に受け継がれ、多様な趣向を持つ庭園が生み出されてきました。

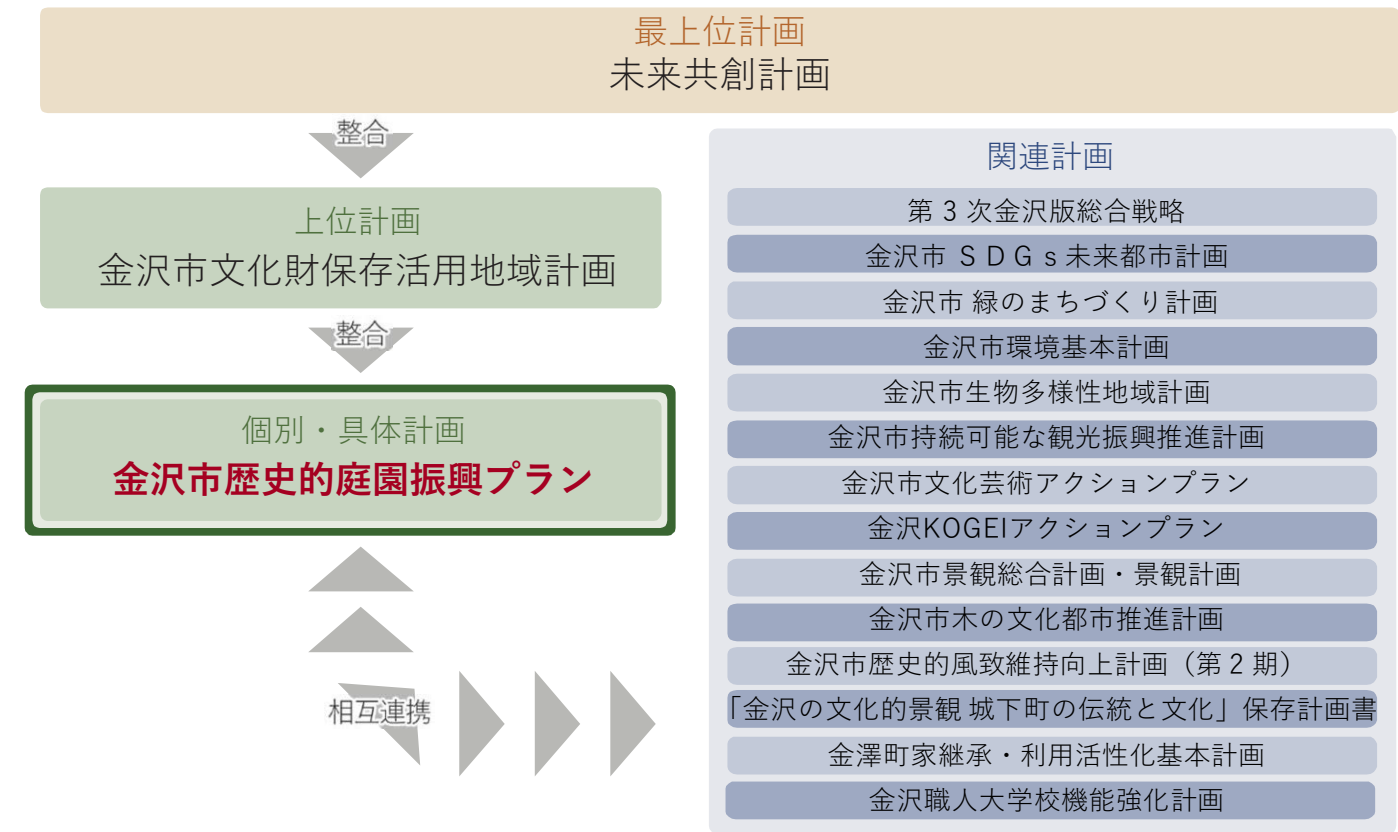
これら一連の庭園は、建造物や自然環境、あるいは茶道などの伝統文化とも密接に関連しながら今日まで継承されてきたものであり、歴史都市金沢を象徴する貴重な文化遺産であるといえます。

さらに近年では、金沢城跡を核とした中心市街地に展開している、城下町時代からの都市構造に由来する豊かな用水網と、この流れを取り入れた庭園群が、都市のグリーンインフラ、SDGsなどの観点からも高い注目を集めており、本市は、国連環境計画が認定する「都市生態系再生モデル都市」に、国内で唯一選ばれています。

本プランは、このような金沢の庭園にみられる多面的な特徴の検討・整理を通して「金沢の庭園文化」を定義することで、歴史的庭園が有する価値や魅力を顕在化させ、歴史遺産・文化観光資源としての効果的な活用の推進を図るとともに、価値や魅力を共有する関係者が協働し、歴史的庭園を持続可能なかたちで保存継承していくことを目指して作成するものです。

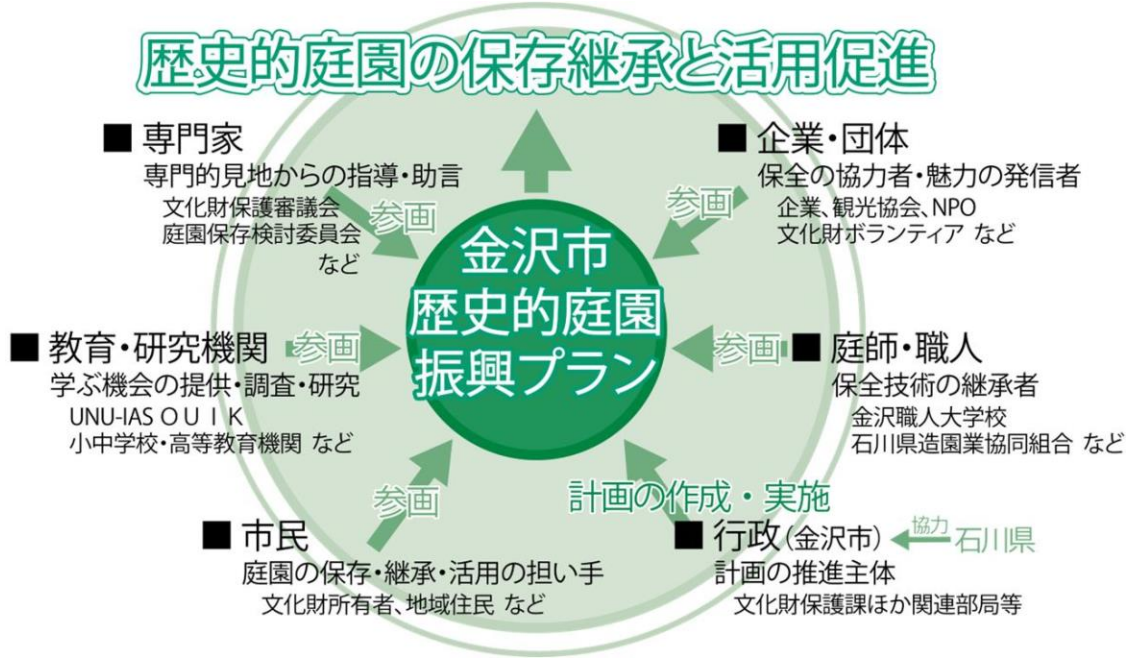
プランの位置付け

本プランは、本市の最上位計画である「未来共創計画」及び、上位計画である「金沢市文化財保存活用地域計画」の個別・具体計画として位置づけ、その他市の関連計画との相互連携を図りながら実施していきます。



プランの推進体制

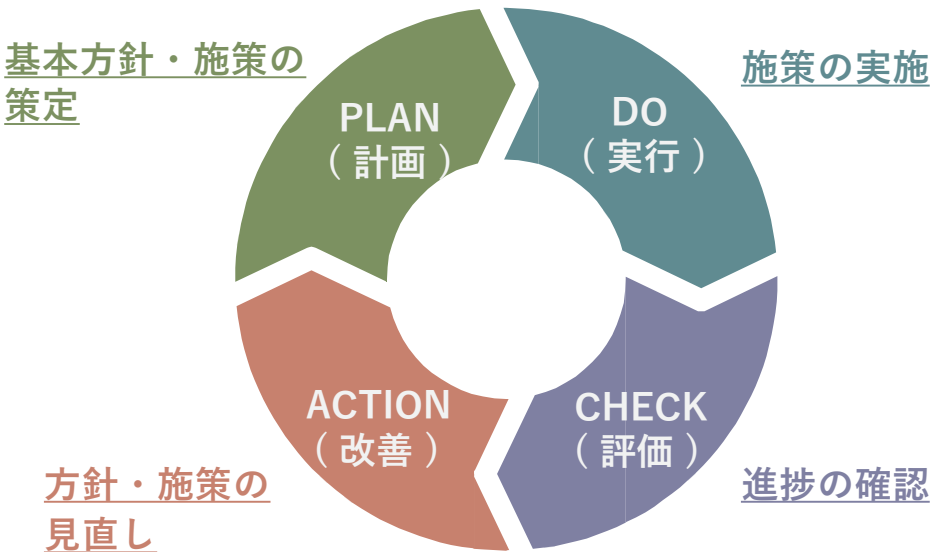
プランを推進するにあたり、市民、行政、職人、各団体、教育・研究機関などの関係者がそれぞれの役割を果たしながら、一体として取り組む体制を強化し、歴史的庭園の保存継承と活用促進を図ります。



プラン推進体制のイメージ

プランの進行管理

プランの期間は、令和7年度から令和16年度までの10年間です。
PDCAサイクルにより施策の実施状況・効果等を期間ごとに評価・検討し、取り組みの継続的な実施と改善を図っていくこととします。また、歴史的庭園を取り巻く社会情勢の変化等にも柔軟に対応することとし、必要に応じて期間内であっても施策の追加・見直し等を行っていきます。



PDCAによる進行管理イメージ

金沢市歴史的庭園振興プラン ー概要版ー

金沢の庭園文化

“庭園文化”の言葉が意味するもの

日本庭園の歴史は古く千年以上も遡ることができ、庭づくりの文化は全国の北から南の隅々にまで広がっています。それぞれの地域で長い年月の間に多様な庭園がつくられ、その地に根差す人々の日々の営みのなかで、大切に受け継がれてきました。

人が介在することによって成立する庭園ですが、その造形は土・石・水・植物といった自然物で構成されています。したがって本質的にその地の気候風土に大きく影響されることとなりますが、そのことが庭園に「地域性」（地域による固有性、独自性、地域らしさ）をもたらしめています。

これらのことを踏まえ、本プランでは“庭園文化”を以下のように整理しました。

庭園文化 = 歴史・風土のなかで生まれ、育まれた地域性のある庭の文化

金沢の庭園の特徴

現在の金沢の中心市街地は、元来の自然環境を素地として展開し、また同時に、江戸時代に形成された都市の基本的な性格を色濃く受け継いでもいます。加賀・能登・越中を領地とした最大大名・加賀藩主前田家は、防衛の必要から、3つの丘陵・台地（卯辰山・小立野台地・寺町台地）の間を2つの河川（浅野川・犀川）が流れるこの地の自然条件を巧みに読み取り、両河川に挟まれた小立野台地の先端の城郭を中心とする、同心円状の城下町を創り上げました。

いまこのまちの姿をつぶさに観察すれば、起伏に富んだ地形を背景に水と緑が織りなす都市空間が形成され、そのなかに気候風土に対応した多彩な文化が展開していることがわかります。



自然・風土



金沢は、白山山系から連なる山々を南東に背負い、西には日本海の海岸が広がります。冬季には北西の季節風が山々にぶつかることで大量の雪を降らせ、山地からつづく幾筋の河川が平野に豊富な水をもたらします。この変化に富む環境が、都市の基盤を成しています。



重層する都市空間

豊富な木々がつくる緑がまちの全体に行き渡る様子を指して、金沢は古く「森の都」^{みやこ}とも形容されてきました。城跡を中心に広大な緑地を抱え、これを取り巻く庭園が旧武家地に多く集まっています。縁辺の丘陵にも城下町時代に形成された寺院群や墓所の樹林があり、台地縁の自然林とともに現在も豊かな緑量を保っています。石積に沿う坂路や鉤の手に曲がった小路が入り混じる迷路のような街路空間からは、家並みに切り取られるようにしてこうした緑が見え隠れします。近代以降、土地利用の変遷とともに都市の表層的な景観は変化しましたが、いまもって金沢のまちには緑の濃い空間が目立っています。

まちなかには他にも浅野川と犀川を利用した用水が、街路網と同様に天然の地形を生かして張り巡らされており、藩政期から現在まで都市生活の様々な場面で活用されつづけ、庭園の水系にも使われています。



伝統文化

冬場に曇天がつづくことで昼間でも薄暗く、雪がしんと降り積もる金沢の気候は、冬場に晴天の多い地域の人からみれば陰鬱と評されることもあります。まちの人々を内業への集中に導きました。能や茶道、生け花などの屋内で行われるたしなみが生活のなかに根付き、加賀蒔絵や加賀友禅にみられる高度な工芸技術が華開いたその背景には、藩政期以来の振興策に加え、こうした気候も大きく関係しているといえます。なかでも茶道の隆盛は、一期一会の精神のもとに、客人をもてなす場を重視し美しく設えようとする価値観を育み、質の高い茶室建築や露地（茶庭）を生み出したほか、茶道具や掛け軸、懐石や和菓子などへのこだわりが、美術工芸、食文化などの発展にもつながりました。



このように、台地丘陵の豊かな樹林は城や兼六園の借景を成すとともに、町並みの背景ともなって都市の輪郭をかたちづくれます。2つの川を利用した用水は曲水のように町中を流れ、大小の庭を潤しています。城下町の絵図を持ってまちなかの狭い通りを歩けば、そこここに城と城下町の防御のなごりや街路のかたちに出会います。そして、伝統文化に裏打ちされた洗練された美意識が、まちの個性としてにじみ出ています。金沢は、自然基盤を巧みに生かした庭園のようにデザインされた都市といえます。

金沢の庭園文化

金沢の庭園には、こうした都市の成り立ちを反映した、3つの地域性が現れています。

雪国の知恵 ー用と景の追求ー

今日では金沢の冬の風物詩となっている樹木の雪吊り、灯笼・土塀などに施す薦掛けは、この地方に特有の重く湿った雪から大切な庭木や景物などを保護するために編み出された技術であり、まさに雪国の知恵の結晶といえます。長い年月を経て確立された多彩な技法、細部にまで気を配った意匠には、それ単体で庭景となる実用の領域を超えた美しさが備わっており、金沢の庭師が受け継いできた美意識が、職人の技巧として反映されています。



兼六園



長町武家屋敷跡

建築と調和する庭園

金沢では藩政期から、武士住宅や町家に「土縁」と呼ばれる土間の縁側空間を設けるのが一般的でした。外周に立てる板戸を開閉することで屋外空間にも屋内空間にもすることができ、雪によって庭先に出られない冬場に貴重な明かり取りとなるほか、茶道が盛んな金沢では飛石や小灯笼、手水鉢などを設えることで露地の役割をもたせた事例が多くみられます。このような建物と庭の境界をあいまいにする軒内の庭には独特の趣があり、建築と庭園の融合が図られているともいえます。



寺島蔵人邸 庭園



成巽閣庭園

水系を生かした作庭

中心市街地には、城下町の形成に深く関わった辰巳用水、大野庄用水、鞍月用水の流れを取り入れた庭園が集中しています。この造園手法は江戸、明治、大正、昭和の各時代の庭園にみられ、それぞれの庭園で池泉や滝、曲水などの水の意匠に生かされています。他に、山裾などに営まれる庭園では湧水を利用している事例もあり、金沢では豊かな水環境と一体となった庭づくりが伝統的に行われてきたことがわかります。



松風閣庭園



千田家庭園



西氏庭園



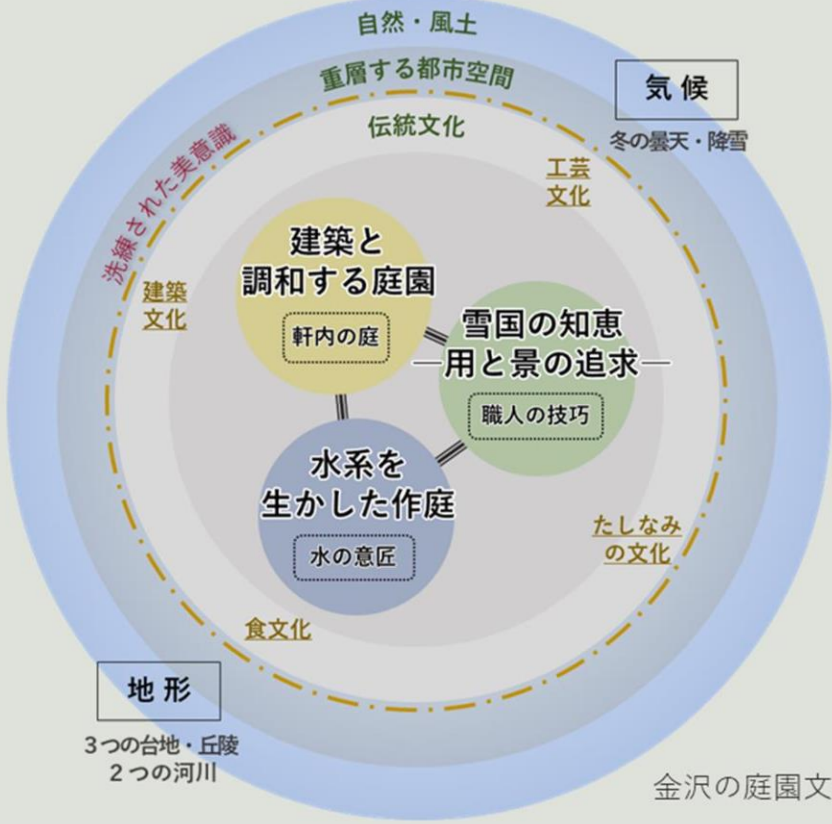
武家屋敷跡野村家 庭園



金沢の庭園文化とは

以上のことを踏まえ、本プランでは、金沢の庭園文化をつぎのとおり定義します。

金沢の歴史・文化を背景に、
雪国の気候風土に即した美術工芸・たしなみと関わるなかで興隆し、
今日まで庭園意匠や技術を育み継承され、
都市空間や都市生態系、景観を培い発展させている文化



金沢の庭園文化のイメージ

まちなかにみられる豊かな水と緑の景観は、都市に暮らす人々が長年にわたり庭園や用水を様々な用途に使い、大切に維持してきた現れといえます。用水の清流を庭に取り入れ水景に利用する形態は、後背の山々から緑地・水系を中心市街地まで連続させ、多様な生き物の生息・生育地をつなぐ回廊の効果を生んでいます。こうした生態系ネットワークの形成は、現代社会が希求する都市(人)と自然の持続可能な共生に対する、一つのモデルを提示しています。

これら金沢の庭園にみられる特徴を活かした施策を実施していくことで、「金沢の庭園文化」を構成する歴史的庭園の価値や魅力を顕在化させ、文化観光資源としての効果的な活用を図るとともに、価値や魅力を共有する関係者が協働し、歴史的庭園を持続可能なかたちで保存継承していく体制を整えます。



金沢市歴史的庭園振興プラン ー概要版ー

施策の体系

本プランでは、歴史的庭園の保存継承と活用促進を図るため、「魅力・価値の発信」「持続可能な保存」「職人技術の継承」「調査・価値付けの推進」の4つの基本方針を掲げ、それぞれの事業を推進します。

基本方針Ⅰ 魅力・価値の発信

雪国の気候風土への対応、多彩な文化との関わりなどにみられる金沢の歴史的庭園の特徴・価値を国内外に広く発信することで、本市のさらなる魅力向上を目指します。

方向性Ⅰ ●都市生態系再生モデル都市の推進

都市と自然のつながりが色濃く現れているまちの特徴を生かし、都市を庭園に見立てた回遊ルートの設定など、SDGsにも対応した手法による魅力発信を推進します。



方向性Ⅱ ●多彩な文化を生かした魅力発信

様々な文化との親和性が高い庭園の特性を生かし、本市の特徴である伝統工芸やたしなみの文化（茶道・華道・香道など）と連動して魅力を発信し、文化観光の推進につなげます。また、デジタル技術（ドローンなど）を利用した映像等により、SNSの活用を図ります。



方向性Ⅲ ●魅力発信人材の育成

「金沢の庭園文化」を広く発信することができる人材を育成することで、市民や観光客などに向けた普及啓発を図ります。



基本方針Ⅲ 職人技術の継承

季節の移ろいとともに姿形を変えていく「生きている庭園」の価値を保全するため、関係組織とも連携しながら、手入れや修理に不可欠な職人技術の確実な継承を目指します。

方向性Ⅰ ●職人育成環境の強化

金沢職人大学校との連携を深め、職人の技術の錬磨や意識の高揚に資する取り組みを推進します。



方向性Ⅱ ●匠の技の周知

金沢の庭師が継承する、用と景を兼ね備えた雪吊りや薦掛けなどの伝統技術を市民・観光客に周知するとともに、気候・風土に根差した匠の技への評価を高めます。



方向性Ⅲ ●関係する組織との連携

庭園の保存に携わる技術者・学識経験者などで構成される「文化財庭園保存技術者協議会」などの全国組織と連携し、技術や知識を習得する機会の創出を図ります。



基本方針Ⅱ 持続可能な保存

庭園の魅力を享受する関係者の参画、効果的な支援、個別の庭園の保存活用計画策定などを通して、将来にわたり歴史的庭園を良好な姿で保存することを目指します。

方向性Ⅰ ●協働の推進

庭園の保存に不可欠な手入れの作業に市民・観光客などが参画する仕組みを確立し、その庭園の価値や都市環境に果たす役割の理解・共有を図ります。



方向性Ⅱ ●支援の拡充

自然物で構成され、変化することが前提である庭園の文化遺産としての特質に鑑み、日常の手入れに対する支援の拡充を検討します。



方向性Ⅲ ●保存活用計画の策定

国名勝となった西氏庭園などの文化財庭園を対象に保存活用計画を策定し、本質的な価値を踏まえた保存・活用を推進します。



基本方針Ⅳ 調査・価値付けの推進

歴史的庭園の把握・調査、価値付けを継続して進めるとともに、新たな認定制度の導入などを通してまちなかの緑の減少を防ぎ、積極的な活用を促進していくことを目指します。

方向性Ⅰ ●庭園調査の促進

伝統的なまちなみが保存されている地域などを主な対象として、所有者の理解のもと総合的な庭園調査を実施し、歴史的庭園の把握を進めます。



方向性Ⅱ ●名勝指定・登録の推進

文化財的な価値付けが可能と考えられる庭園については、専門家で構成される外部有識者会議で意見を聴取し、名勝指定・登録を目指します。



方向性Ⅲ ●新たな認定制度の導入

「金沢の庭園文化」を伝えている歴史的庭園を認定する制度の導入を検討し、森の都金沢を特徴づけるまちなかの緑の保全に努めます。





最大大名が築いた城下町の庭園回廊

金沢城の周囲には、江戸時代からの庭園が点在しています。

藩主をはじめ、大名クラス石高を誇る加賀八家の庭園、武家の庭園、寺社の庭園も含めて回廊のように連なっており、金沢の文化の重なりや、誇るべき文化遺産として、これらを国内外に広く発信します。

施策の体系 魅力・価値の発信

